

2 0 2 2 年 度

第 1 回

2 科 4 科

入 学 試 験 問 題

国 語

試験時間 45分

注 意

- 試験開始の合図<sup>あいず</sup>があるまで、この問題冊子<sup>さつし</sup>を開いて見てはいけません。
- 問題は□<sup>一</sup>から□<sup>四</sup>まであり、全部で13ページです。足りないページや、印刷が分かりづらいところがあった場合は、手をあげて監督者<sup>かんとく</sup>に申し出てください。
- 解答用紙と問題冊子の決められた場所に受験番号を記してください。
- 答えはすべて解答用紙の決められた場所に記入してください。
- 答えを直すときは、きれいに消してから新しい答えを書いてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を問題冊子とともに提出してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は1字で数えます。

佼成学園女子中学校

受験  
番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学一年生の瑞希は「グロイ」マンガが好きで、そのコスプレにも興味を持っている。だが、それを否定されることが怖くて学校の友達にはこの趣味を明かしていない。一方で、SNSのサブアカウントでは本音を語ることができる。瑞希はSNSの自分と学校の自分、どちらが本当の自分なのだろうと悩んでいる。

木曜日の朝、一年C組の教室に入ろうとすると、後ろから園田さんに「おはよ」と声をかけられた。さつき校内で選挙運動をしているのを見たから、ちょうど教室に戻ってきたのだろう。少し日に焼けた顔と耳を出した短いヘアスタイルが、元気はつらつ！ に見える。

「おはよ」と返すと、園田さんは笑顔で言った。

「瑞希さん、コスプレやってんの？」

バクンツと、心臓が跳びはねる。

園田さんのよく通る声に、クラスのみんなが（A）、わたしを見た。

「な、なんで……」

わたしが言葉につまると、園田さんは小首をかしげた。

「昨日、図書館でコスプレの本を借りてたでしょ？」

見られたんだ！

カッと、全身が熱くなる。

※1 サブ垢に書きこんだものがバレたような恥ずかしさ。バクバクと

鼓動が速まり、息苦しくなる。

園田さんのくったくの表情から悪意はないとわかるけど、この

質問はわたしには拷問でしかない。今、莉緒とミンはどんな顔をしているんだろう……。

15

10

5

「コスプレって、エロい衣装？」

どこからか男子の声がして、教室にしのび笑いが広がる。

その時、ギツと、イスを引く音がした。

「瑞希、本借りてくれたんだ。ハロウインの仮装、楽しみだね！」

窓から注ぐ朝日を背負って、莉緒がりと立ちあがる。さらりとしたポニーテールをゆらして、わたしのもとにやってきた。

え？

わたしはわけがわからず、（B）した。すると、

「なんだ、ハロウィンか」

男子がつまらなそうにつぶやき、みんなの顔から一気に興味の色がうすれた。

それでようやくわかった。

莉緒はわたしに助け船を出してくれたんだ……。

（C）、力が抜けた。② なにかの呪縛が解かれたように、急に呼吸が楽になる。

「仮装用の衣装を作るの？ いいなあ、私も作りたい」

園田さんだけがますます興味の色を濃くして、わたしを見た。

「衣装作ってみたいの？」

わたしが問いなおすと、園田さんは力強くうなずいた。

「うん、作りたい！」

とくん、と心が動く。

もしかして、園田さんは同じ趣味を持っているのかな。

「あの……わたしも初心者だから教えられないけど、いっしょに作る？」

わたしがおずおずと言うと、

「わ、いいの？ うれしい！」

40

35

30

25

20

ばあつと笑顔を放つ園田さんを見て、莉緒も笑顔になった。

「じゃあ、本気のハロウィンパーティーやろう！」

「やろう、やろう！」

いつの間にかそばに来ていたミンが、こぶしをふりあげた。

昼休みは、投票前の最後の選挙運動になるという。わたしたちも園田さんについていき「一年C組の園田純奈をよろしくお願ひしまーす」と言つて校内をまわった。

放課後は、窓側の莉緒の席のまわりに集まった。園田さんが午後四時から選挙前の説明会があるというので、それまでつきあうことになったのだ。

莉緒とミンが窓を背にしてすわり、ふたりに向き合うかたちでわたしと園田さんがすわる。

「明日、全校集会で演説したあと、それぞれ教室に戻って投票になるんだって。今日の集まりでは、演説の順番とか説明されるみたい」

園田さんの話に、「ふーん」と、うなずく。

「園田さんは、なんで副会長に立候補しようと思ったの？」

莉緒が聞くと、園田さんは前髪まえがみのピンをつけなおして顔を上げた。

「私、小学生の時、陰いんキヤだったんだよね」

「いっがい」

ミンが目を見開く。

暗い、目立たない陰キヤなんて、元気はつらつ系の園田さんからは想像がつかない。

園田さんは「だから」と、続けた。

「この学校に入学した時、これまでとはちがうキャラになろうと決めた

45

の。今までやったことのないリーダー役にも挑戦ちようせんしようって思ったんだよね」

「すごい。自分で決めて、そうできるなんて」

わたしがつぶやくと、園田さんは「ううん」と首をふった。

「なんか、今のほうが楽なんだよね。むりやり今の自分になろうとがんばったわけじゃなくて、こっちのほうが地に近かったのかも。小学生の頃はまわりに遠慮えんりよして、うまく自分を出せなかったんだと思う」

こっちのほうが地に近かった——という言葉が、胸の中に反響はんきやうした。

わたしの地って、どこにあるんだろう。今こうして学校で話しているわたしは、地のわたしなのかな。

考えていると、園田さんが「そろそろ行くね」と、立ちあがった。

「つきあってくれて、ありがと。選挙が終わったら、ハロウィンパーティーのこと、ゆっくり話そうね」

「うん。がんばってね」

手をふって園田さんを見送り、莉緒が立ちあがる。

「帰ろ」

「あ、ちよつと、その前に……」

わたしは姿勢を正して、莉緒を見た。

「今朝は、助けてくれて、ありがと」

頭を下げると、「え？ なに？」と、ミンがわたしと莉緒の顔を交互こうごに見た。

「朝のコスプレの本の話」

わたしの言葉に、ミンが首をかしげる。

「それは莉緒が頼たのんでいた本なんですよ。……って、ちがうの？」

莉緒はイスにすわりなおした。

90

85

80

75

70

「男子がエロい衣装とか言って嫌な方向に行きそうだったから、とっさに思いついたことを言ったんだよ」

「えー、とっさのウソ？ 全然わからなかったー」

ミンが目をまるくする。

ウソをつけて、わたしをかばってくれた――。

じんと、胸がふるえる。

わたしを友だちだと思ってくれている莉緒に、ちゃんと向き合いた

い。<sup>③</sup>この関係をサブ垢になんかしちゃダメだ。<sup>※2</sup>あのときの真奈と

わたしのように、いつか気持ちまですれちがってしまう。

わたしは、すうっと、息を吸った。

「うちの近くに、中高生が利用できるサブリガーデンっていう区の施設があるんだけど、わたし、そこでコスプレの体験イベントを企画してて

……」

「そんな活動してんだ」

「そんな施設があるんだ」

莉緒とミンが同時に声を上げる。ふたりともめずらしいものを見るような顔をしているけど、拒否する感じではない。

わたしは思いきって言った。

「わたし、『アイムロンリー』とか『デスマインダー』とか、グロイマンガが好きなんだ」

バクバクと、心臓の音が聞こえる。

ふたりの顔をうかがうと、ミンがピクッと体を動かした。

「知ってる！ あたしは読んだことないけど、そのマンガ、いところが持ってる」

「『アイムロンリー』は去年、映画になってたよね？」

莉緒に聞かれて、わたしはうなずいた。

「うん。この間、その映画の応援上映イベントがサブリガーデンであつて、そこでコスプレイヤーをやっている大学生と知り合ったの」

「へえー」

ふたりの声が重なる。

「ああ、それでコスプレのイベントをすることになったんだ」

莉緒の言葉に、「そう」とうなずく。

ミンは両手を合わせて、遠くを見るまなざしになった。

「あたし、マンガは断然、ラブコメ派。『本宮くんは悪くない』とか。

あの妄想ファクション、やってみたいー」

「ラブコメ……。あんまり読んだことなかったけど、ちょっと惹かれる」

わたしが言うのと、莉緒は「なにそれ」と、スマホをとりだして検索した。『本宮くんは悪くない』の試し読みを見つけて、ささっと読む。

「なるほど、ファクション雑誌風に架空の<sup>※3</sup>シチュエーションとファクションを妄想するんだ。『これから年下彼氏と遊園地デート』『職場の上司に叱られてしょぼん』って、なにこれ、笑えるー」

くすくす笑う莉緒に、「おかしいでしょー」と、ミンが顔を寄せてスマホをのぞく。窓から差しこむ夕陽が、あたたかくふたりを包んでいた。その光景に、ふうっと、安堵の息がもれる。

わたしと同じものが好きなわけではない。わたしの趣味を否定はしない、けど、共感することもない。でも、これでいいんだ。同じものを好きでなくていい。それぞれが好きなものを持ちよれば、なにか変化が生まれるのかもしれない。

「妄想ファクション、わたしも見たい！」

<sup>④</sup>わたしは立ちあがって、窓ぎわに移動した。莉緒、ミンと同じ夕陽

が当たる場所へ、と。

(ささきあり『サード・プレイス』)

※1 サブ垢………ネット利用者が使う用語で、メインのアカウントと使い分けるサブアカウントのこと。

※2 あのとときの真奈とわたしのように………瑞希は小学生の頃、好きなマンガを友人の真奈に否定され、関係が疎遠になってしまった経験がある。

※3 シチュエーション………状況。

問一 (A) (B) (C) に当てはまる言葉として最も適当なものを次のの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ぱつと                      イ ふつと  
ウ きよとんと                エ すつくと

問二 〰〰〰線部(a)「くつたくなのい」、(b)「りんと」とはどのような意味ですか。最も適当なものを次のの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(a)                      くつたくなのい  
ア 迷いが無い  
イ 裏表がない  
ウ こだわりがない  
エ 明らかでない

(b)                      りんと  
ア あわてた様子  
イ 困惑した様子  
ウ うきうきした様子  
エ 引きしまった様子

問三 — 線部① 「この質問はわたしには拷問でしかない」とあります

が、「わたし」がこのように感じたのはどうですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分がコスプレに興味を持っていることは、友人に知られたいなかつたから。

イ ハロウィンパーティーでコスプレをすることは、まだ秘密にしていたかつたから。

ウ コスプレの本を借りたことは、友人に頼まれたとはいえ誰にも知られたいなかつたから。

エ まだそれほど親しくない園田さんだけには、コスプレのことは秘密にしていたかつたから。

問四 — 線部② 「なにかの呪縛が解かれたように、急に呼吸が楽にな

る」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア うそがばれてしまわないかとびくびくしていたが、友人が自分をかばってくれると思えたこと。

イ コスプレについて男子にからかわれることを恐れていたが、実際にはそんなことはないだろうと思えたこと。

ウ ハロウィンのコスプレの準備を秘密にしようと思っていたが、その必要はないと思えたこと。

エ 自分のコスプレへの関心をどう思われるか恐れていたが、友人たち<sup>おそ</sup>に理解してもらえないかもしれないと思えたこと。

問五 — 線部③「この関係をサブ垢になんかしちゃダメだ」とありま

すが、このときの瑞希の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで本音を話せなかった相手に、これからはどんなことでも相談したい。

イ 自分が心から友達だと思えた相手に、サブアカウントで悪口を言っ

てはいけない。  
ウ 自分を友達だと思ってくれる相手と、本当の自分を包み隠さず付き合っ

ていきたい。  
エ サブアカウントだけで連絡をとっていた相手と、これからは現実でも向き合っ

問六 — 線部④「わたしは立ちあがって、窓ぎわに移動した」とあり

ますが、このときの瑞希の気持ちを説明した次の文の 1、

2 にあてはまる言葉を、それぞれ十五字程度で本文中からぬき出しなさい。

1 と気づき、 2 何か新しいことが起

きるかもしれないと期待する気持ち。

問七 本文の登場人物と物語における役割の説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 園田さんは主人公のクラスメイトであり、校内で選挙運動をしている。主人公に対して、過去の自分と今の自分を対比的に語ったことで、主人公はこれまでに持っていなかった考え方に気づくことができた。

イ ミンは主人公の仲良しグループの一人であり、他の人の気持ちに寄りそうことができる。莉緒が見せたマンガの画像を見て、自分の好みを抑えて共感したことで、本心で付き合う人間関係の見本を瑞希に示した。

ウ 瑞希は主人公であり、この物語はすべて彼女の視点を通して語られている。この表現方法では、主人公の感情については明確にわかるものの、他の登場人物の心情がそのままにはわからない可能性がある。

エ 莉緒は主人公の仲良しグループの一人であり、相手の心情に敏感で、すぐに対応することができる。物語では瑞希の危機を察知し、助けるために機転を利かせた。このことで、瑞希は自分の気持ちを話すきっかけを得た。

問八 ―― 部「だから」について、授業で次のような会話がなされた。会話を参考にし、ここで園田さんが「だから」という言葉を用いた意図として最も適当なものを後から選び、記号で答えなさい。

生徒 先生！ この「だから」という言葉は、他の言葉でも意味が通ります。「でも」を入れても違和感がないのに、どうして「だから」と言ったのでしょうか。

先生 なるほど、良い指摘ですね。「だから」の前後の園田さんの発言を取り出すと、「私、小学生の時、陰キャだったんだよね」「この学校に入学した時、これまでとはちがうキャラになろうと決めたの」となります。反対の内容のことが書かれているので、逆接の接続詞「でも」が論理的に正しいように見えますね。ところが、ここで園田さんが「だから」という順接の接続詞を使ったことで、内面で考えていることを知ることができるのです。

ア 園田さんは小学生の頃の自分を否定的に考えていたため、中学校では自分を変えたいと思っていた。

イ 園田さんは小学生の頃に目立つことができなかつたため、中学校ではリーダーに挑戦したいと思っていた。

ウ 園田さんは小学生の頃の自分を本当の自分だと考えていたため、今の自分は無理をしていると考えていた。

エ 園田さんは小学生の頃に遠慮から自分を出せなかつたため、中学校では本当の自分を見せたいと考えていた。

---

問題は次のページに続きます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

死者の存在を無視して、生きている人間だけで物事を決定しようとする。それは、生者の驕りに過ぎません。民主主義は常に、死者によって制約された民主主義、<sup>※</sup>立憲民主主義でなければならないのです。

私がこうした「死者」の存在について考えるようになった契機は、二〇一一年の東日本大震災です。このことには、これまで何度か触れましたが、私にとって非常に重要なことなので、改めて述べておきたいと思います。

あのとき私は海外にいて、震災の日から一週間以上経ってようやく帰国できたのですが、それとともに大きな悩みになりまし  
た。ある通信社で連載していた論考記事の締切が間近に迫っていたから  
です。

このタイミングですから、当然震災のことを書かなくてはならない。記事は全国に配信され、もちろん被災地にも届きます。帰国して見たテレビには、被災地の人たちが避難所で食い入るように新聞を読んでいる姿が映し出されていて、それは単なる情報ではなく、自分たちの身に起こったことに対する「言葉」を求めている姿のように見えました。<sup>①</sup>その人たちに向けて言葉を発しなければならぬ。これは大変な仕事だと思いました。

いったい、どんな言葉を届けたいのか。何日も部屋にこもって考え続けるうちに、ふと思いついたのは、その一年ほど前に亡くなった友人のことでした。担当編集者でもあり、非常に大きな存在だった彼がいなくなった空白をうまく埋められなかった私は、しばらく何をやって

いても <sup>A</sup>上の空のような日々を過ごしていたのです。

そんなある日、仕事で夜遅くに帰宅したときのことです。疲れ果てていて、少しでも早く眠りたかったのですが、翌朝が締切の原稿が一本あったことを思い出し、渋々パソコンの前に座りました。(1)、今思えば恥ずかしいのですが、以前にどこかで話したり書いたりしたことのある内容を頭の中から引っぱり出して、二〇〜三〇分ほどで原稿を書き上げたのです。

(2)、いざその原稿を送るのに送信ボタンをクリックしようとしたときに、ふと手が止まりました。どこからか、亡くなった友人のまなざしを感じたのです。それで、改めてもう一度原稿を読み直してみました。やはり面白くない。結局、一から書き直して、今度は三時間くらいでなんとか満足のいくものが書けました。送信ボタンをクリックするときにも、迷いはありませんでした。

ベッドに入ってからふと、この三時間は何だったんだろう、と考えました。そのときに「ああ、そうか」と思ったのです。<sup>②</sup>私は亡くなった友人と出会い直したのだ。彼はいなくなったと思っていたけれど、そうではない。彼がいなかったら、書き直した原稿は生まれなかっただろう。彼はもう、生きてはいないけれど、死者として確かに存在していて、私と対話を続けているんだ。なぜこんな当たり前のことに気づかなかっただろう、と思つて、深い安堵感を覚えました。そして、この「出会い直し」を大切にすることこそが、私がこれから「よく生きる」ということなのではないか、と感じたのです。

そのことを思い出しながら、被災地の人たちに向けて原稿を書きました。亡くなった人たちは、死者として存在している。これからの復興も、死者と協働しながらやっていけばいい。死者と一緒にここから生き

ていくことによって、新たな未来が構築される——。そんな内容の文章になりました。

政治学者が何を書いているんだ、と思った人もいたかもしれません。でも、私は書き終えてから、これが政治学だ、これこそが立憲主義だと思いました。死者を ないがしろにし、死者との共同性を失った私たちがこそが、民主主義を暴走させているのではないかと考えたのです。

しばらく考え続けるうち、これまで私が読んできた書物の中に、同じようなことを書いているものがたくさんあることに気づきました。

中でも、この問題を分かりやすく、そして鋭く論じていると感じたのが、イギリスの作家、G・K・チェスタトン（一八七四～一九三六）です。

（中略）

さらに、もう一冊思い出して手に取った本が、民俗学者・柳田国男（一八七五～一九六二）の『先祖の話』でした。これは、柳田が一九四五年、アジア太平洋戦争末期に、日本各地の先祖供養などの儀礼・慣習について書いた本なのですが、その中にこんなエピソードが登場します。

柳田は、多摩の丘陵地を歩いていたときに、自分と同じくらいの年の老人に出会います。彼が、こんなことを語ったというのです。

自分は長く商売をやり、その商売を息子に継がせし、家も建てたし、やるべきことはやった。<sup>③</sup>後は私にとって重要なのは「ご先祖になる」ことだ——。

柳田は、この人には死んだ後にも仕事があるのだ、と考えました。（3）、亡くなった後、仏壇に彼の遺影が掲げられる。子どもや孫が、自分の子に向かって「おじいちゃんがお空から見てるから、きちんとなさい」という。それが彼の死んだ後の仕事なのだ、というわけです。

50

55

60

65

70

そして、その仕事を果たすためには、今をよく生きなければなりません。「おじいちゃんは立派だった」からこそ、「おじいちゃんが見てるよ」といつてもらえるのですね。老人は、未来の他者と対話するために、今生懸命生きていくわけです。そのことに柳田は非常に感心して、『先祖の話』を書いたのだと思います。

かつての私たちの日常には、常にそのようにして「死者」の存在があり、そのことが社会の倫理や規範ともつながっていました。しかしいつからか、<sup>④</sup>私たちは生者のことだけを思い、死者の存在を排除する社会を作ってきたしまったのではないのでしょうか。

（中島岳志『自分ごとの政治学』）

※ 立憲民主主義……憲法や法律にもとづきながら、国民が中心となって政治を行っていく考え。

問一（1）～（3）に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア そして      イ つまり  
ウ ところが      エ なぜなら

75

80

問二 ～～線部A「上の空」、B「ないがしろにし（する）」の本文中の意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 上の空

ア ほんやりとしているさま

イ かなしんでいるさま

ウ いらいらしているさま

B ないがしろにし

ア だいなしにする

イ じゃまものにする

ウ たいせつにする

問三 ——線部①「その人たちに向けて言葉を発しなければならぬ」について、次の(1)(2)に答えなさい。

(1)「その人たち」とは誰だれのことですか。本文中から七字でぬき出して答えなさい。

(2)最終的に作者はどのような「言葉」を発したのですか。その内容が書かれている段落をこの後の本文中から探し、最初の五字を答えなさい。

問四 ——線部②「私は亡くなった友人と出会い直したのだ」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 友人はすでに亡くなってしまったが、改めて思い出すことで友人の新しい一面に気づけたということ。

イ 友人はすでに亡くなってしまったが、今も筆者のために助言してくれていたことに気づけたということ。

ウ 友人はすでに亡くなってしまったが、共通の経験は何度も思い出せることに気づけたということ。

エ 友人はすでに亡くなってしまったが、筆者と対話を続けていることに気づけたということ。

問五 ——線部③「後は私にとって重要なのは『ご先祖になる』ことだ——」とありますが、「ご先祖になる」とはどういうことですか。本文中の言葉を用いて、「になること。」に続くように三十字以内で説明しなさい。

問六 ――線部④「私たちは生者のことだけを思い、死者の存在を排

除する社会を作ってきたのではないでしようか」について、A～Dの四人が話し合いました。それぞれの意見の中から、筆者の考えとして適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

A 今を生きている私たちが、社会の主役には違いありませんが、それでは自己中心的な考え方になってしまいます。それは民主主義の暴走につながる危険な考え方なのです。

B 筆者の考えていることは、東日本大震災という過去に起きた大きな出来事がきっかけとなっています。しかし新しい未来をつくっていくための、私たちにもつながっていく大切な考えとなっています。

C よりよい社会のためには死者の言葉に耳を傾ける必要があるということですね。亡くなった友人や先祖のように、私たちとかつて一緒に過ごした人の言葉だけが、いま最も必要とされているのです。

D 現在と未来の問題を解決するためには、死者と共に作られてきたこの社会の成り立ちを振り返ることが大切です。様々な書物を読むことは、その助けとなります。

三

①～⑩の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがな  
に直して答えなさい。

- ① 手紙をユウソウする。
- ② 丘の上のテンボウ台。
- ③ 食料をチヨゾウする。
- ④ 川の水をジヨウリュウする。
- ⑤ セイケツな服装を心がける。
- ⑥ 表裏一体の關係にある。
- ⑦ 思ったより容易に解決した。
- ⑧ 数十年前の難破船。
- ⑨ 制服を貸与する。
- ⑩ 他の商品に類似している。

四

①～⑤の□に当てはまる漢字を、後の語群からそれぞれ選び、  
文を完成させなさい。

- ① □をすえて勉強に取り組む。
- ② 彼女の立派な行いに□が下がる。
- ③ 友人と□を割って、本音で話し合う。
- ④ この問題は私の□にあまる。
- ⑤ すでに知っているとは□が早い。

頭 顔 目 口 耳 手 腹 腰 足